
強き燕は二度羽ばたく

龍々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強き燕は二度羽ばたく

【Nコード】

N3718Y

【作者名】

龍々

【あらすじ】

もしもピアノが弾けたなら…では無く、もしも海燕が生きていたなら、というお話。

外伝にて海燕が復活する過程の様な物が書かれていますので、是非そちらも・・・

燕は再び羽ばたいた（前書き）

二次創作にて始めてのオリキャラが皆無な小説。
海燕カッコイイよ海燕。

海燕様キター（。▽。）ー！
それではどうぞ御覧下さい

燕は再び羽ばたいた

冷たい雨が激しく降り注ぐ中、小柄な女の死神の上に抱きしめる様に一人の男の死神が凭れ掛かる。

男の背には刀が貫いており、それを握るのは女の死神。

男の死神の名前は志波海燕、妻を虚に殺された拳句その虚に自分の体に乗っ取られていた。

そこを部下の朽木ルキアに解放されたのだが、それは死と同義だった。

「朽木い……俺の我儘に付き合わせてひでえ目に遭わせちゃったな……わりい、きつかったろ……？」

海燕はルキアの頭を撫で、せめてもの謝罪を述べる。

「ありがとな……お陰で、心は此処に置いていける……」

海燕はその言葉を最後に体を地面に落とし、息絶える。

ルキアは海燕の名を叫んだ。

自分の心を襲う罪悪感を振り払うかのように。

現世で死んだ者は虚に墜ちた者を例外として、通常は死神の手によってあの世、つまりは尸魂界へ送られるのだが、尸魂界で死んだ者は尸魂界を構築する霊子に分解される。

所が海燕はそれらの例に当てはまらなかった。

海燕の霊子は現世で再構築され、再び死神として蘇ったのだ。

「ここは……現世か？　どういう事だ？　俺は死んだ筈だよな……」

海燕は訳が分からないと首を傾げる。

海燕は現在、現世の街中を歩いている。

ここは空座町という町で、現世駐在任務でも幾度か来たことがある。尤も、以前来た時は江戸時代かそこらだったので、初めて来た町といっても間違いでは無い。

そんな中、抑えてはいるが隊長各の霊圧が感じられた為、そこへ向かう。

「浦原……商店？」

「ハイハイ！その死神サン、何か御用で？」

いきなり男が後ろから現れ、海燕はそれに驚く。

そして店の中から黒猫が姿を現す。

そこまでなら普通の猫なのだが、その猫は話すことができた。

「お主……海燕かの？」

「うお！？化け猫！！なんで俺の名前知ってんだ！？」

「誰が化け猫か！！」

化け猫、基黒猫は鋭い爪で海燕の顔に三本線の傷をつける。

その様子に海燕の後ろに立っている男が苦笑いしたのはまた余談である。

燕は再び羽ばたいた（後書き）

海燕は僕がBLEACHの中でかなり好感度上位だったりします。
もう全てがかっこよすぎる！！

でも僕が書くとかっこよくないのは何故！？
それでは次回もお楽しみに

燕は朽ちる女と出会う（前書き）

タイトルでお察しかと思いますが、ルキアと再会します。
若干カイルキ気味。

あ、でもくっ付いてラブラブ、と言う訳ではありません。
海燕には嫁もいたしね・・・

燕は朽ちる女と出会う

店の店主の名前は浦原喜助。

以前護廷十三隊の十二番隊隊長を務めていた男だ。

そして黒猫は四楓院夜一という、隠密機動の元総司令官でもある。

勿論、本来の姿は猫ではなく、海燕や浦原と同じような人間の姿をしている。

尤も、彼らは人間ではなく、死神なのだが。

海燕が現世で生活を始めてから数週間、霊子の薄い現世でも問題なく生活する事が出来た。

因みに海燕は暫くの間浦原商店で居候をする事になっている。

さらに浦原から貰った滋養剤で霊圧を回復させ、現世でも尸魂界と同じ様に活動できる。

因みに滋養剤には髑髏マークが書いてあって、飲むのに戸惑ったのは失笑物である。

そして日々、虚退治をする中、死神と虚の霊圧がぶつかっている、即ち戦闘している事に気付く。

「……あ、死神の方やべえな」

海燕は斬魄刀、捩花を携え、その場に向かおうとするが、浦原によってそれを阻まれる。

浦原曰く、助けに行くのはもう少し経ってから、との事。

死神の霊圧は一瞬、薄くなったが、その後直ぐに最初より増幅して蘇る。

海燕は不思議に思いながらも、浦原はこれを待っていたのだと察する。

「さ、死神サンの元へいきましようか！」

浦原はいつもの格好で海燕と共に霊圧がある場所へと向かった。

「あ、あなたは……」

気絶したオレンジ色の髪を生やした死神と白い着物を着た、力を失った死神。

その死神が海燕を見て、驚愕している。

海燕の方はその死神を見て、驚くと共に嬉しそうな表情を浮かべる。

「海……燕、殿？」

海燕の名を呼んだ死神の名前は朽木ルキア。

海燕の嘗ての部下であり、自分を虚の呪縛から救ってくれた、女の死神。

尤も、ルキアの方は自分が海燕を殺したという自責の念に駆られているのだが。

「久しぶりだな、朽木！」

笑顔で自分の名を呼ぶ海燕にますます困惑するルキア。

海燕はどう説明しようかと悩んでいる。

「まあまあ、積もる話は後にして、今はこの少年とその家族の皆さんの手当てをしましょうか、もちろん記憶置換も忘れずに」

海燕とルキアは浦原商店にて、互いの状況等を説明しあう。

海燕は尸魂界で絶命した後、現世で復活、ルキアは現世に駐在任務を言い渡された後、オレンジ色の髪をした靈感のある少年、黒崎一護と出会いその家族が虚に襲われて、ルキアも負傷して一護に霊圧を贈与し、今に至る。

「……海燕殿の説明が異様に短いのは気のせいでしょうか」

「あー、気にすんな、俺も今一自分の状況が良く分かってねえんだ」
そう言う海燕を見て、ルキアは突然ホロリと涙を流す。

海燕はルキアの頭を撫でた後、優しく笑いかける。

「申し訳ありませんでした……海燕殿!!!」

ルキアは海燕の手を握り締め、海燕の生を実感する。

そして海燕はルキアの罪悪感を洗い流すようにルキアを抱きしめる。

「いいか、俺は虚に殺されたんだ。そして朽木は俺を救ってくれた恩人だ。朽木が気にする様な事は何一つねえよ。あの時、俺を救ってくれてありがとうな」

ルキアは海燕の言葉一つ一つに涙を流し、全てが救われた。

燕は朽ちる女と出会う（後書き）

海燕をカッコよく書けない……他の方の作品でみた海燕は感動するほどカッコ良かったんですけど……ああ、どうしてこうなった。

燕は護る者に修行を施す（前書き）

海燕と一護の初対面です。

一護は恋次と白哉の登場の時までに原作より強くするつもりです。

燕は護る者に修行を施す

ルキアの死神の力は現在、人間の青年、黒崎一護の中にある。本来なら半分の力を渡した筈だが、何故か全ての力が一護に渡ってしまった。

因みに原因は今の所一護の霊力が異様に高かったから、としか解っていない。

そしてルキアは一護に死神代行として働く事を承諾させた後、これから毎日特訓をしていく事になる。

だが、一護に修行を教えるのはルキアでは力不足、浦原では店の営業がある為忙しい。

すると当然――

「今日からおめえに修行を教える志波海燕だ！よろしく！！」
と、なる訳である。

一護の反応は当然、誰だよ、となり、ルキアからは自分の上司、と説明される。

今一腑に落ちない一護だが、強制的に体から魂魄を抜かれ、死神の姿になる。

その後海燕も義骸を脱ぎ、死神の本体が現れる。

「さて、修行第一段階だが……先ず一護、おめえには“始解”を習得してもらう！」

始解とは、死神の斬魄刀の一段階目の解放。

斬魄刀の持ち主によって様々な姿形があり、能力も様々。

その名の通り直接攻撃を行う直接攻撃系、特殊な能力が備わっている鬼道系と、様々種類がある。

「本当なら死神になったばかりの奴に始解はムズイんだけど……おめえは霊圧たけえから、ま、大丈夫だろ！」

いい加減に言う海燕を見て一護呆れた表情を見せるが、次の光景を見て、表情が強張る。

「水天逆巻け……振花！」

海燕は刀を頭上に上げ、両手で器用に回転させる。すると刀の形状が変化し、三又の槍になる。

「俺の斬魄刀は振花、つってな、水を操る流水系の斬魄刀だ……斬魄刀は解号と名前を呼ぶことで本来の姿を現す……一護の斬魄刀はどんな能力なんだろうな？」

海燕が得意げに笑うと一護は少し感心する。

自分の刀がどんな物なのだろうかと少しドキドキしてしまったのは内緒の話だ。

一護は現在、胡坐をかいた膝の上に斬魄刀を置き、精神世界に入ろうとしている。

斬魄刀の始解に必要なのは対話と同調。

対話は斬魄刀の本体との会話、同調は本体との霊圧のシンクロを指す。

さらに斬魄刀との絆を深める事により、刀に眠る力が解放されていき、それは死神の鍛錬の一つでもある。

一護は精神世界の中でサングラスと黒いコートを着用した髭面の男性とで会おう。

一護は名前を聞くもその言葉の名前の部分だけノイズが掛かったように途切れ途切れになり、しっかりと耳に届かない。

「あんたが、俺の斬魄刀……か？」

一護は男性に自身の刀であるかを確認する。

男性はコクリと頷き、再び自分の名を口に出す。

「私はざ……つだ。お前と会うのを楽しみにしていた、一護……」

「俺の名前をしってんのか？」

男性は再び頷き、自分が何であるかを話す。

「私はお前の力、そしてお前自身……お前の知っている事は全て知っている。そしてお前の知らない事も……」

一護は男性の言葉に耳を傾けながら、この人物が自分の斬魄刀、力の源である事を理解する。

「なあ、名前は聞き取れねえけど、いつか俺があんたの名前を聞ける様になったら力を貸してくれるか？」

「私はお前に力を貸すときは出し惜しみをしない。私の名前が聞こえたならば、いつでも力を貸してやろう……」

「……ってな事を斬魄刀は言っていたぜ？」

一護は男性と話した会話の一部始終を海燕に話す。

海燕は公園のテーブルに座りながら一護の話を聞き、真剣な面持ちで相槌を打つ。

「ま、一回で名前が分かったら誰でも死神になれらあな。そこまで会話出来ただけでも大したもんだ」

海燕は気さくに笑い、一護を好評価する。

一護は少し得意げになった後、ルキアの方を見る。

「で、あいつは何してんだ？」

ルキアは真剣かつ緊張しながら大声でホラー漫画を音読しており、その場に異様な空気を流していた。

一護は自分の体に、海燕は義骸に戻った後で休憩中。

そして一護の背後に忍び寄る黒い影が一つ。

「くつろさつき、くーん！！」

「ぎゃあ!？」

一護にいきなり声を掛け、驚かしたのは井上織姫という、一護のクラスメイト。

人間に扮して学校に通っているルキアは一瞬誰だか分からなかったが、一護に教えられ、どこぞのお嬢様の様にスカートの裾を上げて挨拶する。

「あら、井上さん、ご機嫌よう！」

「う、ご機嫌よう」

少々、というか大分天然の気がある井上はそれに釣られ、自分もスカートの裾を上げて挨拶する。

一護が心の中で井上にツツコミを入れたのは仕方のない事だろう。

「あれ、そっちの人は？なんか黒崎君に少し似てるけど……」

井上は海燕を見て不思議に思い、その疑問を素直に述べる。

海燕は何を言おうか迷った後、似てるのは偶然で、自分は一護の昔の知り合い、と話す。

その様子から見て、嘘を付いているのはバレバレなのだが、井上には十分それで通じた様だ。

そしてルキアは井上の右ひざを見て、ある事に気付く。

「井上さん……その傷は……ちよつと見せてもらってもいい？」

ルキアはその傷を見て、険しい表情を浮かべる。

そして海燕の顔を見て、互いに頷き合う。

何がなんだかわから無い一護と井上はそろって首を傾げる。

一護は井上与別れた後、それぞれの家へと帰ろうとする。

海燕は浦原商店へ、一護は自宅へ。

この時、一護はルキアも海燕と共に行くのかと思っていたが――

――ルキアは何と一護の部屋の押入れの中にいた。

しかも妹のパジャマを勝手に着ながら。

「一護……虚だ!!」

突然、ルキアが飛び出し、一護の魂魄を抜く。

そして一護がいた場所には巨大な虚の手があり、虚はそのまま家の外へと逃げた。

「どういう事だ……今のは井上の兄貴だった……!!」

一護の部屋に沈黙が走った。

燕は護る者に修行を施す（後書き）

原作に生き返った海燕が加わるこの物語、一護&恋次&ルキアの輪の中に海燕が加わる訳ですよ。
妄想全開です！いやっほう！

燕は姫と巨人を助ける（前書き）

チャドと織姫の話。

燕は姫と巨人を助ける

一護とルキア、そして途中で合流した海燕が向かった先は何と井上の自宅。

ルキアの話から魂魄は、虚に堕ちた後に先ず身内の魂を食らうという事から虚、もとい井上の兄は先ず先に妹である織姫を襲うと予想する。

一護は相手がクラスメイトの兄であるという事から、斬る事に戸惑うが、海燕の話から戸惑いは決心へと変わる。

「虚を斬魄刀を斬るって事は罪を洗い流すって事だ。心を洗い流し、尸魂界にいける様にしてやるんだ。殺すんじゃねえ、昇華してやるんだよ」

井上の兄なら生前に大きな罪は犯していないはず、そう確信した一護は屋根を駆ける足のスピードを上げる。

一瞬、一護の背中に乗っていたルキアが振り落とされそうになったのには、海燕も思わず笑ってしまう。

井上の兄との戦闘の後、井上とその兄が和解し、兄は正気を取り戻した。

そして自分で刀を仮面に突き刺し、尸魂界へ昇華していった。

海燕は一護の修行の為、終始を見てるだけで終わり、井上と遊びに来ていた有沢竜貴に記憶置換を終えた後で一護の肩を強く叩く。

「兄貴の存在理由がなんたるか……いっちょ前な事言いやがって、この、この！」

海燕は一護の頭をロックし、拳骨を捻じ込む。

一護は井上の兄に兄弟で兄が何故先に生まれてくるかをこう話した。兄は後から生まれてくる弟や妹を護る為に生まれてくる。

だから兄が妹に向かって“死ね”等とは間違っても言うな、と。

「でもよ、俺もそう思うぜ？ 兄貴が何で先に生まれて来たのがよ

「？」

海燕には妹と弟が一人ずついるという。

海燕曰く、どっちも口より先に手が出る頭の足りない馬鹿、との事だが、一護は密かに海燕も似たような物だと思った。

織姫の兄の一件が片付いたその数日後、一護達はさらなる事件に巻き込まれる。

一護はルキア、海燕と共に一体の虚を追いかける。

名前をシュリーカーという、生前、連続無差別殺人という犯した根本から“悪”の外道だ。そしてさらにその虚が追っているのは茶渡泰虎という、一護の親友であり、通称をチャドという。

正確にはシュリーカーが追っているのはチャドが抱えているインコで、インコの体の中にはシバタユウイチという少年の魂魄が入っており、シュリーカーはその少年に三ヶ月間自分から逃げる事が出来たら母親を生き返らしてやる、という真赤な嘘を語る。そしてシバタを助けに来た死神達を襲い食っていたという。

「野郎……とんでもねえ外道だな」

海燕はシバタの事を想い、思わず表情を険しくする。

「間違いなく奴は地獄に落ちるでしょう……」

ルキアの言う地獄に落ちる、とは一般の人間が言うような悪い事をするところの類では無い。

本当に落ちるのだ。

先日海燕が行ったように斬魄刀で虚を斬ると罪を洗い流し尸魂界へと送られる。

だが、洗い流せるのは虚になった後の罪であり、生前に大きな罪を起こした虚は地獄に引き渡す契約になっているという。

途中の道で一護は妹である夏梨を見つける。

「一護！お前はその娘を家に連れて行け！！あの外道野郎は……俺

がとつちめる!!」

海燕は義魂丸を飲み込み、義骸を脱ぎ去る。

そしてルキアと共にシュリーカーの下へと急ぐ。

『そーら、逃げろ逃げろお!! 早くしねえと俺のヒルが爆発するぜえ!!!!』

シュリーカーは舌の笛で爆弾である蛭を爆発させていく。

恐怖感を煽る為に、中るギリギリの所でかわさせる。

「ム……!!」

チャドはシバタの入った鳥籠を自分の両腕で蛭の爆発から護る。

「ダメだよ! オジチャンシンジャウヨ……!!」

シバタは必死にチャドを止めようとするもチャドは危険をかえりみずにシバタだけを護ろうとする。

それは死んだ祖父の言葉から来るものであり、チャドはシバタをシュリーカーから護る為に自分を犠牲にする。

『ほーら!! 油断してると……』

シュリーカーは何時の間にかチャドの直ぐ真上で飛んでおり、爆弾である蛭をチャドに投げつける。

『死んじまうぜえ!!』

蛭がチャドに当たる寸前、その蛭は何かにか吹っ飛ばされ、その蛭は遠くで爆発する。

「てめえは俺がぶっ飛ばす!!」

海燕がルキアと共にシュリーカーの元へ駆けつけ、シュリーカーは新しい玩具が増えたとはかりに気味の悪い笑みを浮かべる。

一方海燕は解放前の斬魄刀を構え、シュリーカーを睨みつける。

「もう一度言うぜ……てめえは俺が……」

海燕は瞬歩でシュリーカーの後ろに回りこむ。

「ぶっ飛ばす!!」

海燕とシュリーカーの戦闘が始まった。

燕は姫と巨人を助ける（後書き）

井上兄との戦闘ですが、それは原作と同じなので、割愛しました。

この小説での海燕の初戦闘。

海燕は“通常なら”圧勝する筈ですが……！？
次回をお楽しみに。

燕は魔に蝕まれる

海燕は解放した自身の斬魄刀を構え、シュリーカーに斬りかかる。ルキアは現在霊力が僅かしか持ち合わせていないので、チャドとシバタを非難させる事に専念する。

「転校生……さっき俺を追っていた奴は一体何なんだ？」

チャドはルキアにシュリーカーの事を訪ねる。

尤も、チャド自身にはシュリーカーの事は見えてもいなければ声も聞こえないのだが。

「案ずるな……奴は直に地獄に落ちる」

ルキアの言葉に疑問を覚えながらもチャドは黙ってルキアの隣に立つ。

海燕は振花から溢れ出る水流をシュリーカーに向け発射する。

シュリーカーはそれを全て避けるが、時々掠つてもいる。

海燕は元護廷十三隊、十三番隊副隊長だ。

シュリーカーは死神を二人ほど食らっており、霊力もそこそ高い。だが所詮はそこそこ、であり本物の実力と経験を重ねた海燕には遠く及ばない。

「テメエの悪事も此処までだ！地獄に落ちて反省しろ！！」

地に落ちたシュリーカーに海燕が斬りかかる。

が、海燕の手はシュリーカーに当たる寸前で止まり、もう片方の手は自身の頭を押さえる。

突然、海燕に頭痛が襲ったのだ。

「ぐううう！？何だ……こんな時に……ぐああ！」

海燕は遂に振花を手から放し、地面にのた打ち回る。

これを好機と見たシュリーカーは、一旦距離を取り、大口を開けて海燕を食らおうとする。

『テメエは俺の三人目の餌だ！美味しく頂いてやるぜえ！！』

シュリーカーの歯が海燕の肩に食い込む。

頭と右肩、両方の痛みが海燕に身体を襲い、肩からは血を流す。

『ん？なんだ？この匂いは……そうか、テメェも俺と同族じゃねえか？』

「どういう…事……だ」

海燕はシュリーカーの発言に疑問を覚えながらも捩花を握ろうとする。

だが、如何せん、手に力が入らず、捩花は虚しく地面に転がる。

シュリーカーは今度は海燕の腕に噛み付く。

シュリーカーは海燕の腕から離れようとせず、海燕の肩から鮮血が舞う。

だが、シュリーカーの仮面に一閃、刀傷がつく。

一護が戻ってきたのだ。

「大丈夫か海燕さん……何があったか知らねえけど、あんたがそんなになるまでやられるって事はいつ、強えのか？」

一護はまだ名前の分からない斬魄刀を抜き、シュリーカーの方を向く。

そして一瞬でシュリーカーの背後へ回る。

海燕から教わった“瞬歩”を使用したからだ。

一護は巨大な斬魄刀でシュリーカーの背中を斬り裂き、次に足を刀で串刺しにする。

『ぎゃああ!!』

「わかるか？狩られる奴の恐怖が？」

シュリーカーは自分で足を引きちぎり、空中へ逃亡する。

「そうだ、自分で足を千切って逃げたくなる程怖えだろ？……その恐怖を、たっぷり味わいやがれ!!」

一護は空中までシュリーカーを追いかけて、仮面を貫く。

するとその空間から大きな門が現れる。

これは地獄の門、生前に罪を犯した虚を裁き、地獄に閉じ込める為の入り口。

シュリーカーは大きな刀でその身を貫かれ、大きな笑い声を上げる地獄の使者と共に地獄に落ちた。

一護達はシバタの魂魄を元の身体に戻そうと試みたが、体と魂魄が長く離れすぎた為、因果の鎖が既に切れていた。

その為、シバタは尸魂界へ送られる事になる。

チャドはシバタと別れの挨拶をした後、ルキアに記憶置換をされて虚に関する記憶が全て消された。

一護は傷ついたチャドを自宅、つまり黒崎医院に連れて行った。

一護と分かれた後、海燕は浦原に先ほどの頭痛の事を話す。

「……そうですか、確かに虚は、志波サンの事を同族、と言ったんですね？」

海燕は浦原にああ、と返事をした後、どういう事を尋ねる。

「えー、とにかく、死神にそう言う症状が過去にも確認されていてねえ、専門家を紹介しましょう。その人達はそういうの大得意ですから」

海燕は浦原に連れられ、ある場所に向かった。

燕は魔に蝕まれる（後書き）

タグの内なる虚…（タメ）…ですね。

そして海燕の内なる虚は…おっと、危ない危ない。

次回をお楽しみに。

燕は仇と出会う

海燕が浦原に連れられていった場所とは、空座町の外れにある倉庫。さらに倉庫の地下には広大な空間が広がっており、浦原商店の勉強部屋に心なしか似ている。

違う所と言えば温泉がない事と何故かキッチンがあることだ。

さらに言えば隅には某少年漫画や成人向け雑誌が綺麗に積み重なっていた。

「皆さーん！少し用事があるのですがー！！」

浦原が大声でこの空間の主を呼ぶ。

すると数人の男女が瞬歩を駆使してその場に姿を現す。

「何や、浦原？そいつ死神やろ？」

おかっぱ頭の青年、平子真子が海燕を指差す。

海燕の頭の中にはこいつ、何処かで見たことがあるな、という疑問でいっぱいだった。

当然だろう。

此処にいる男女等は過去に一人を除き護廷十三隊の隊長、副隊長だった者達である。

平子真子ひらこしんじを筆頭さるがきに猿柿さるがきひより、愛川羅武あいかわらぶ、鳳橋楼十郎おおとりばちじゅうろう、矢胴丸リサやどうまる、六車拳西むくるまけんせい、久南白くなましろ、そして元副鬼道長うしやうだ、有昭田鉢玄はちげんのメンバーで構成されるのが仮面ヴァイの軍勢ザードという集団である。

浦原が海燕を此処に連れてきた理由は海燕の頭痛の原因にある。

それは海燕が現世に復活する経緯にあった虚の霊子を吸収した事から海燕の中に内なる虚が巣食っているので無いか、という事。

この仮面の軍勢は嘗て死神でありながら虚の力を手にしてた者達であるという事から此処に連れて来たのだ。

そして元五番隊隊長、平子真子が調べた結果、案の定海燕の中に虚の存在があったという。

「ど、どうすりゃ俺の中の虚を追い出せるんだ？」

海燕の問いに平子はチツチツチ、と指を鳴らす。

「追い出すことは出来へん……飼ひ慣らすんや、自分の方が強い、って叩き込んでな？」

平子の後に、元十二番隊副隊長、猿柿ひよ里がにやりと口角を吊り上げる。

「これはワレが“元”死神やから協力するんやぞ？現役の死神だったら放っておいたわ！」

この少女は死神や人間といった存在を嫌っており、それらの存在は殺すのも躊躇わない。

それをいつも平子が止め、ひよ里が平子をどつくのは平子にとって災難である。

三時間前、平子によって意識を落とされた海燕の姿は段々と虚のそれに変わっていった。

それを鉢玄、通称ハッチの鬼道によって結界を張られ、仮面の軍勢がその中で順繰りに虚かした海燕と戦う。

海燕の精神世界には海燕と同じ姿、唯一つ違う所は色が全体的に白い所だろうか、その姿をした虚がいて、海燕に話しかけた。

『久しぶりよの、この世界の王よ……』

その声は虚独特の地に響く声をしていた。

そして海燕は虚の久しぶり、という言葉に疑問を覚える。

「お前なんか知らねえよ、生憎俺には虚の知り合い何かいねえんだ」
海燕がそういうと虚はニタリと口角を吊り上げる。

『……うむ、こういうえば分かりやすいかのう？“貴様の女は美味かった”ぞ！』

瞬間、海燕は刀を抜き、虚に斬りかかる。

すると虚は素手でそれを受け止め、真剣白刃取り宛らの状態となる。

「てめえ……あの時の虚かよ……！！！」

海燕は物凄い形相で虚を睨み付ける。

一方、虚は薄ら笑みを浮かべたまま、片手を離し、腰に刺してある刀を抜く。

そして海燕の頭に振り下ろすが、海燕はそれを瞬歩で避ける。

「テメエが俺の中にいるとはな、胸くそ悪いっていったらありやしねえ……」

海燕は内心で舌打ちをして虚を睨み付ける。

相変わらず薄気味悪い笑みを浮かべたままの虚は刀を頭上に上げ、くるくると回し始める。

「おい……その動作は……」

虚は笑みを絶やさず、海燕のほうを見る。

『水天逆巻け……振花アア!!』

虚の刀は白い色をした振花となり、槍の先端から水流を発射する。海燕も、自身の刀を解放した後、同じ動作をする。

「何でてめえが振花を使ってやがる!?!」

『当たり前であらう……我は貴様、貴様は我なのじゃ!! 同じ技を使えて何の不思議がある!?!』

虚は笑い声を上げながら海燕に斬りかかった。

燕は仇と出会う（後書き）

やはり海燕の内なる虚はメタスタシアでしょう、と思い、こんな話になりました。

口調が良く思い出せない……

次回をお楽しみに

燕は魔を征する

精神世界で海燕が虚と戦っている一方、現実世界では元九番隊隊長、六車拳西が虚化した海燕と戦っていた。

拳西の斬魄刀は断地風たちかぜというコンバットナイフだ。

能力は糸状の風を打ち放ち、相手を切り裂くという、海燕の水流を放射する振花と属性こそ違う物の、少し似ている所がある。

尤も、海燕は現在、虚化していて、斬魄刀の能力を比べる事は出来ないのだが。

『ギャオオオオ!!』

啼き声、姿共に虚のそれとなった海燕の髪は蛇のようになっており、体からはいくつもの手や足が生えていて、それはまるで海燕の体を乗っ取った虚、メタスタシアの様になっている。

「ちっ、この馬鹿野郎が!! 早く帰ってきやがれ!!」

今拳西が相手にしている虚は元々は海燕の物である体を使っている為、戦闘力も半端なく高い。

元隊長である拳西も虚化すれば元副隊長である海燕を簡単に倒す事が出来るのだが、この戦闘の目的は海燕を倒す事ではなく、海燕が“戻ってくる”までの時間を稼ぐためである。

「拳西……交代や」

元八番隊副隊長、矢胴丸リサが結界の中に入り、拳西とバトンタッチをする。

「海燕……っていったっけ？ 悪いけど、手加減はせえへんで、覚悟しとき！」

リサは斬魄刀を鞘から抜き、瞬時に開放する。

「潰せ! 鉄漿蜻蛉はぐろとんぼ!!」

すると刀身が槍の様な、矛の様な姿に変形し、リサはそれを構えた。虚化した海燕は口を大きく開け、口内にエネルギーを溜める。

それは虚閃セロという、大虚や破面特有の技、霊圧で構築されている、

破壊の閃光で、虚の力を使う仮面の軍勢も使う事ができる。
海燕は虚閃を放った後、リサに向かって飛び掛った。

精神世界で海燕は自分の姿をしたメタスタシアとの戦闘で、相手を劣勢に追い込んでいる。

「おい！ テメエはそんなに弱い癖して、都を殺したのか！？ ふざけんじゃねえ！ 本気を出しやがれ！！」

海燕は許せなかった。

自分の愛するものがこんな弱い者に殺されたのかと思うと。

しかし次の瞬間、海燕の手から振花が消え去り、メタスタシアは自身の持つ“振花”で海燕を斬りさいた。

『ククク……忘れた訳ではあるまい？ 我には一日で最初に触れた物の斬魄刀を消滅させる事ができる……』

海燕は腹から血を流しながら、メタスタシアを睨み付ける。

現実世界にて、現在は平子が海燕と戦っている。

『……もう、ギブアップかい！』

海燕から何を感じとったのか、平子はハッチに何かの合図を送る。

ハッチはこくと頷き、海燕を束縛する。

暴れる海燕を抑えるこの鬼道は海燕の霊圧を一時的に封じ、それと共に内なる虚も封じる、という物だった。

「こんの根性なしが……」

ひよ里が親指の腹を噛みながらそう言い放つとそれを聞いていたのか、海燕が暗い表情をする。

「そう、だな……」

根性無しというのを認める発言にひよ里は例の如く飛び蹴りを食らわせる。

その後、海燕が涙を流したのには、全員、見て見ない振りをせざるを得なかった。

燕はキング オブ ニューヨーク(?)と出会う(前書き)

キングオブニューヨーク……ブリーチを最初の巻から読んでいる方はネタが分かると思います。

燕はキング オブ ニューヨーク(?)と出会う

現在海燕は一護に斬魄刀との対話をさせている。

斬魄刀との対話は自信の力を引き出す為に重要な事であり、それを行う事で本体との絆を深める事が出来る。

そしてここ二、三日で一護はようやく斬魄刀の名前を聞き出すことが出来た。

名前は斬月ざんげつ、解号の無い、常時開放型の刀で、攻撃力に特化している。

一護によると、斬月はまだ力を隠し持っているらしいが、それもその内引き出せるだろう。

友人にはもちろん死神の事は秘密であり、虚の事や、自分が霊が見えるという事に関しては一切話していない。

一護が学校へ行っている間、海燕は仮面の軍勢の元へ向かう。

「おーい!! 修業に來たから開けてくれ!!」

倉庫のシャッターの前で海燕が叫ぶと、内側から元三番隊隊長、鳳橋楼十郎通称ローズの声が聞こえた。

「オーケー、今開けるから待っててよ」

ガラガラとシャッターが上に上がっていき、ローズがはい、と少々気障に海燕に手を振る。

海燕はそれを気にすることなく、よう、と軽く挨拶をし、地下へと向かう。

海燕が準備運動に腹筋をしてると突然、鳩尾にひよ里の飛び蹴りが入る。

「おいコラハゲェ!! 暑苦しいから余所でやらんかいボケ!!」

その表情は悪戯っぽく、尚且つ楽しそうな顔をしているのには気付かず、海燕は涙目になりながらひよ里の首根っこを後ろからつかむ。

「こんのガキ……何すんだよ」

海燕が表情を引きつらせながら言う。と海燕の顔面にひよ里の拳が入る。

「だ〜れが餓鬼や!! うちは大人の女性やっちゅーねん!! ワレの眼は節穴かい! ハゲ!!」

その後、海燕とひよ里の楽しい追いかっこが始まったのには仮面の軍勢の面々はひよ里を生温かい眼で見るほか無かった。

海燕とひよ里、互いに頭にたんこぶを作った後で、虚化の修業をする。

海燕を気絶させ、結界内に閉じ込めた後でまた一人ずつ戦闘を行う。

そろそろ一護が学校から帰る時間になり、海燕は浦原商店に一時帰宅する。

その時にひよ里が不満そうな顔をしたのはまた別の話だ。

「さて、一護ん家に行くか、」

海燕は店から出て、一護の家へと向かう。

その途中で見覚えのある少年が住宅地の屋根の上を歩いているのを見かける。

尤も、それは歩いている、というより跳ねている、という表現をした方が正しいのだが、それは今はどうでもいい。

「一護……じゃねえよなあれは? ……まさか、改造魂魄かありゃあ!?!」

改造魂魄、とはその昔、護廷十三隊の十二番隊、つまり技術開発局が作り出した対虚用の兵士であり、死体にそれをいれて戦わせる、という計画により作り出された。

尤も、それは死体を戦わせる、という非道さから廃案になり全て廃棄されたのだが。

つまり今海燕の目の前にいるのはその廃棄から逃れた生き残り、という事になる。

そして今改造魂魄が入っているのは一護の体、という事は何が何で

も止めなければいけない。

「待て。待ちやがれー!!」

海燕が追いかけてきたのに気付いた改造魂魄は捕まってるものなのかと速度を上げる。

海燕は瞬歩を駆使して追いかけるが、この改造魂魄は下半身を強化しており、足の速さは半端じゃない。

吾輩は改造魂魄である、名前はまだない……なんてな、ジョークジョーク。

まあ嘘では無いけどな。

俺様は廃棄される恐怖から逃れて町を自由に散歩中。

馬鹿な人間の体に入っているのが少し不満だけど……人間達の視線がめっちゃ気持ちいい!! 所が、その途中で死神が追いかけてきやがった!! な・ん・で!!? この町の担当はあの黒髪の姐さん一人じゃなかったのかよ!!? 嗚呼、綺麗なお姉さん! 何処かに居たら可哀そうな俺を助けて!!

改造魂魄が内心で叫び声をあげながら海燕の追跡から逃げる。

海燕は息を切らせながら瞬歩の速度を上げる。

途中から、一護とルキアと合流するが、途中で虚の反応があった。

何故か改造魂魄もそちらに向かい、三人はそれを疑問に思いながら改造魂魄を追う。

芋虫の様な虚と戦闘しているのは改造魂魄。

何故改造魂魄が虚と戦闘をしているかというと、その理由は彼の生い立ちにあった。

生まれた次の日には自分の廃棄する日が決まっており、毎日を怯えて過ごした。

そして偶然、普通の義魂丸に混ざり、廃棄を逃れる。

だが、いつか見つかって廃棄されるのではないかという恐怖を感じ

ながら現世で浦原の元へ辿りつく。

そして“粗悪品”の箱に入れられ、遂に廃棄されるのかと思った矢先に、雨の手違いにより、自由を手に入れる。

その経験から命は誰かが勝手に奪っていいものではないと感じるようになり、彼は誰よりも殺生を好まない。

そして先ほど、虚が現れた場所には子供達の姿があり、改造魂魄はそれを救う為に虚の居る場所へと向かったのだ。

改造魂魄の戦闘に、一護と海燕が加わり、虚は昇華される。

その後、蟻を潰しそうになった虚を改造魂魄が蹴り上げて、建物から落下しそうになるなど、ハプニングもあったが、この一件は落着

———するかと思ったが、そこに浦原がやってきて改造魂魄を廃棄すると言いますが、ルキアが浦原から改造魂魄を奪い取り、一護の義魂丸はこれでいいという。

「知りませんよ……何かあったらあたしは姿を晦ましますからね……」

「元々霊法の外で動いてる貴様らだ、何も問題は無いだろう」

画して、改造魂魄のコン（命名一護）が黒崎家に厄介になるのだが、一護がこの先自分の義魂丸がコンでよかったと思うのはまた別の話だ。

燕はキング オブ ニューヨーク(?)と出会う(後書き)

コンの登場でっす♪

コンカッコイイしかわいいしで好きです♪

テいうかブリーチで特別嫌いなキャラってルピ以外いない気がします。

一番好きなのはマユリ様です。

他にも剣ちゃん、海燕、えとせとら…

因みに今回のひよ里と海燕ですが、海燕にならひよ里も心を許すんじゃないかなあと言う妄想です。

浦原の前の十二番隊隊長(名前忘れた)は母親を慕うかのように懷いていたと言うので、海燕はお兄ちゃんて良いかな、と。

尤も、ひよ里は素直になれない反抗期のお子様みたいになってますが。

それでは次回をお楽しみに

燕は……(前書き)

今回は殆ど一護のターンです。

燕は……

息を切らし、憎き親の仇を討とうと自身の斬魄刀、斬月を振り下ろす。

対して、その虚はそれを軽々と避ける。

上を良く見れば雨雲が空を黒く染める。

一護は“六年前の今日”を思い出しながら、母親の敵、グランドフィッシャーを睨み付けた。

それは数時間前に遡る。

その時は雨の気配など無く、外には晴れ渡る空が続いていた。

一護の部屋の押入れに住み着いているルキアと、何となく部屋に上がった海燕に一護があるお願いをする。

「死神業を休みたいだど？ 戯けめ！ そんな事が許される訳……」

ルキアの口を両手で塞いで海燕は一護に理由を聞く。

一護曰く、明日は墓参りだそうだ。

それも自分の慕っていた母親の——

ルキアもそう言われて却下する訳にもいかず、渋々一護が明日は死神業を休む事を承諾した。

そして、最後の一護の一言が無ければ、黒崎家だけで行かせる心算だった——

「明日はお袋が死んだ日——いや、“殺された”日だ」

一護の部屋に、暫らくの間沈黙が走った。

「おい、ルキア……オメエ本当についてくのか？ 今日ぐれえ家族だけの時間をだな……」

海燕の言葉を聞いて、ルキアは一回目を閉じて、言葉を整理した後、海燕の言葉に返答する。

「一護は母親が殺された————と言っておりまして。それは若し

かしたら虚の仕業という可能性もあります。それを一護から聞かなければ……」

ルキアの主張に海燕は盛大に溜め息を付く。

まるで融通の利かない妹に世話を焼く兄の様に。

「わあったよ……お前がそこまで言うんなら俺もついていく」

こうして、家族団欒の一時をルキアと海燕が邪魔をする事になったのだが、この時になって、この選択は正しいと思ったのだった。

大好きだった——否、今でもお袋は大好きだ。

俺のせいで死なせてしまった、家族の中心であるお袋を。

それは俺のせいでもあり、今、目の前にいる薄汚い虚のせいでもある。

こいつを倒す事で、お袋に償いが出来るのなら俺は——

「俺はテメエを倒さなきゃいけないえ!!」

一護は気合を入れるように吼え、グランドフィッシャーに斬りかかる。

石垣の上でルキアと海燕が一護と、その戦闘の行方を見守る。

腹から血を流しながらも、何かに取り憑かれたかの様に、一心不乱にグランドフィッシャーに斬りかかる。

だが、グランドフィッシャーは頭に付いている疑似餌を一護の母親の姿に変え、一護の攻撃の手を止める。

「止めて……一護、刀を引いて頂戴……母さんを斬らないで……!!」

グランドフィッシャーが一護の母親、真咲を利用したのが運の尽きだった。

何故なら、これで“グランドフィッシャー”は“一護”を完全に怒らせてしまったのだから。

「こんなところに……お袋の姿を担ぎ出してんじゃねえよ……」

一護は斬月を握り締め、溢れる力を確かに感じる。

そして、刀からは声が聞こえ、一護はその声に耳を傾ける。

『一護……この外道を許してはならない。叫べ……!!それはお前だけの力だ——』

一護はグランドフィッシャーの顔を睨みつけ、声を高らかに叫ぶ。

「月牙……天衝……!!」

白い三日月型の斬撃がグランドフィッシャーの仮面を割り、そのまま胴体も真っ二つに割る。

だが虚の弱点である仮面を割っても直ぐにグランドフィッシャーが消滅する事は無く、まだ口も利ける状態である。

『クックク……ワシを殺して満足か?だが、貴様の母親殺しの罪は消える事は……』

ザク、とグランドフィッシャーの腹に斬月の刃が突き刺さる。

一護は無言で、汚物を見る様な目でグランドフィッシャーを見つめる。

「そうだ、俺の罪は消えない……俺がテメエの罠に引っ掛かりさえしなけりゃお袋は死ぬ事が無かった」

だから、と刀を振り上げ、グランドフィッシャーに止めを刺そうとする。

「俺がお袋を殺したから、だから償いに少しでも多くの人間を護るんだよ……!!」

斬月は、確実にグランドフィッシャーの仮面を捕らえ、その後で黒く変色し、グランドフィッシャーの体は消え去った。

グランドフィッシャーを倒した後で、呆ける一護の肩に海燕が手を置く。

そして唐突に、一護にある、質問をする。

「一護……心つてのは何処にあると思う?」

海燕は昔、ルキアに問いかけた事と同じ事を問う。

一護は当時のルキアと同じく、自分の胸に手をやり、其処に在る、と答える。

海燕は予想していた答えに苦笑した後、それは違うと言う。

「心ってのはな、此処に在るんだと、俺は思う」

そういつて海燕は自分と一護の間に拳を置く。

心は誰かと誰かと触れ合った時、其処に生まれるのだと、海燕は言う。

「オメエのお袋さんは、死んだ時に一護に心を預けたんじゃないのか？お袋さんが、一人で死んだ時、オメエは傍にいたんだろ？だからお袋さんの心は一護の中にあるんだ」

海燕が諭す様に一護に言うと言は俯き、「くせえよ」と一言言った。

その後、二人の殴り合いの喧嘩が始まったのだが、それは一護に取って、気持ちを切り替える事が出来るいいチャンスだった。

燕は……（後書き）

海燕にカッコイイ事言わせようと思ったのに全然かっこよくならな
い……

何処かに文才落ちてないでしょうか。

見つけたら自分のとこまでお届け下さい（笑）

此処からは、話を考えた方がいい物の、入れる場所がない事に気付い
てお蔵入りになった話。

浦原商店の一室でルキアともう一人、金髪の少女、猿柿ひよ里がに
らみ合っていた。

それに巻き込まれているのは、否、むしろ争いの中心となっている
のは海燕だ。

それは数時間前に遡る。

仮面の軍勢のメンバー、猿柿ひよ里が浦原商店の近くを通りかかっ
た時、中から海燕の声が聞こえたので、中を覗いてみた。

すると其処には海燕と談笑をする女性、朽木ルキアの姿があった。
何故か無性に腹立たしくなり土足で店内に入る。

「おいコラ！ハゲツバメエ！その馬鹿面女はなんやねんこら！！」
ひよ里が怒鳴るのを見て、ルキアが若干眉を吊り上げながら海燕に
尋ねる。

「海燕殿……この教育のなっていない子供は何者ですか……？」
この一言が切っ掛けで、冒頭に繋がる。

見たいな感じでワードに書いてみたんですが、入れる場所が全然無いので此処に書きました。
評価等はこれ抜きでお願いします。

燕は国民的大スターと出会う（前書き）

BLEACHの中で『こくみんてきすたー』とえばこの方しかいません。

ドン・観音寺です!!

……テレビの司会風に言ってみました、気にしないでください。ただのおふざけですから。

まあ、観音寺好きなんですけどね。

キャラ的にも中の人的にも。

あそこまではっちゃんける一般人（？）も珍しいですよ。

うふふのふ

燕は国民的大スターと出会う

派手な衣装を着た男が、テレビの向こうで何やら訳のわからない言葉を叫んでいる。

それは英語ののだろうか、日本人にとって訳がわからないのは変わりがない。

男の名前はドン・観音寺。

本名を観音寺ミサオ丸と言うのだが、彼の職業は霊媒師兼芸能人。それも自身が主役の番組で毎週25%を取るほどに大人気の。

黒崎家では、一心と遊子が夢中になって見ているのだが、逆に一護と夏梨は興味が無い。

因みに一心と遊子は共に霊が見えないという事から、観音寺に憧れていると見える。

尤も、遊子の方はうっすらと霊を見る事が出来るのだが。

さらに一護は興味が無い所か、この番組の事が嫌いだ。

一護は自分が霊が見えるからか、霊、神などの存在が曖昧な物を使う商売が嫌いである。

だから雑誌のページにある、今日の運勢等も信じない。

だから、其処に新しい友達が出来る、等と書いてあってもこれっぽっちも信じていなかった――

――のだが、一護は死神化した自分を視認する事が出来る男、ドン・観音寺に戦友と書いて友と呼ばれたのには気が萎えた。

それを見て海燕は苦笑するのだが、追ってくる虚がそんな暇を与えてくれない。

蛙の様な顔をした虚は口から粘液を吐き、此方の動きを止めようとしてくる。

一護が刀を振るおうにも此処は建物の中だ。

巨大なそれは相手に斬りかかろうとした時、天井に突き刺さってし

まう。

「此処が建物の中だって事忘れてた……」

そんなミスをする一護に海燕は頭を抱える仕草をする。

因みに、一護の修業を図る為に手助けはしない。

「自分^{デメエ}で何とかしろ!!」

数歩下がって一護を見守る。

一護は自棄になって足で戦おうとするのだが、其処を何と観音寺が自らの持つステッキ、ただの棒なので名前は割愛するが、それを駆使して虚の動きを止める。

これには海燕も動かざるを得ず、観音寺を突き飛ばす。

「ノー!!ヘイ、ユー!!何をするのかね!?私がこの怪物に敵わないのは分かる!だが、せめてボーイを護って散ろうと……」

喚く観音寺の顔を踏みつけ、天井の、一護の刀が刺さっている部分を鬼道で破壊する。

「後は自分で何とかしやがれ!!」

海燕は観音寺を引きずりながら後ろへ下がる。

その際に観音寺が喚いていたのだが、海燕はそれを無視して後ろへ下がる。

一護を捕縛し、屋上へと移動する虚を追って海燕も屋上へ向かう。

「あの野郎……最近弛んでやがるな」

一護の体たらくを見て、そう嘆く海燕——の後ろを匍匐前進で付いていく観音寺。

この状況を一言で言うなら混沌^{カオス}というだろうか。

その混沌の中心に居るのが観音寺なのと言うまでもないだろう。

屋上、つまり開けた場所に着いてからという者の、一護の動きは何時もの調子を取り戻していた。

それは狭い建物内に居たのもあるだろうが、観音寺という御邪魔無

視がいなくなったのが大きいだろう。

「ボーイ！私が来たからにはもう安心だ！！」

その御邪魔無視が態々此処に来たのは完全なる計算外である。
その後ろには面倒くさそう表情をしている海燕もいる。

「海燕さん……ちゃんと、監視しとけよ！！」

一回、二回、三回と斬りつけ、虚を弱らせる。

尤も、仮面を狙えば一撃で済むのだが、今の一護にそんな余裕は無い。

虚は高く飛び、上空に舞い上がる。

其処から先ほどの粘液を連射してくるのだが、一護の月牙天衝にて弾かれる。

そしてそのまま、三日月型の斬撃が虚の体を通り抜ける。

上半分と下半分が二つに割れた虚はそのまま、黒く変色し、昇華していった。

あの一護と海燕は観音寺にある物を渡された。

それは観音寺のファンクラブのメンバーズカードなのだが、直ぐに破り捨てたのと言うまでもない。

燕は国民的大スターと出会う（後書き）

一番弟子の一護と二番弟子の海燕です。

いや、

だからどうか無いですけど。

燕は今回出番無く……（前書き）

まあタイトル通りです。

今回海燕は一言しか喋りません。

燕は今回出番無く……

虚を討伐するものの中に、死神とは別に滅却師^{クインシー}という者がいる。

彼らは虚を憎み、昇華させるのではなく、唯、滅却する事、殺す事だけを考えた。

その結果、尸魂界と現世のバランスが崩れ、世界が破滅する寸前まで至った。

その事で死神達は滅却師達を殲滅する事を決定。

今回は滅却師と死神の葛藤を描いた話――

それはとある夜の出会いから始まった。

何時もの様に虚を退治する一護とそれを見守る海燕とルキア。

何時もの様に、とっはいつても最近は何者かに虚が倒されている為、虚と遭遇する機会が無かったのだが。

虚を倒した直後、眼鏡を掛けた、全身白の服を着ている青年が声を掛けてきた。

「こんばんは、黒崎君、朽木さん、それと……志波さんだったかな？」

突然現れた青年に警戒しながらも、刀を構えるという事はしない。

彼は虚ではなく、人間だからだ。

「……向こうに虚が出たみたいだよ？」

青年の手首にぶら下げている十字架のアクセサリーが一瞬、光ったかと思うと次の瞬間には青白く光る霊子の矢となっていた。

「疾っ!!」

その一言と共に矢を放つとそれは的確に虚の仮面を捉え、昇華、否、滅却させる。

「……滅却師、か？」

海燕が確認するように言うと言青年はコクリと頷く。

「僕は滅却師の石田雨竜^{いしだうりゅう}、死神を憎むものだ……黒崎に志波、君達

をね」

あの夜の翌日に石田が自分のクラスメイトだと判明した一護は尾行を行う。

勿論、霊圧のコントロールが苦手な一護に気付かない筈も無く――

「いつまで付いてくるつもりだい？ 黒崎一護」

――となる訳である。

空座町とその周辺には、虚の大群が押し寄せていた。

石田が虚を誘き寄せる為の撒き餌を使ってどちらが多く倒せるかと言う勝負をしようと言うのだ。

「僕に殴りかかる暇があったら走り回った方がいい。虚は霊力が高い人間を襲う筈だからね」

平然と言ったのける石田を突き飛ばした後、一護は虚を探すために空座町を走り回る事になった。

ルキアが戦っている相手はオランウータンの様な姿をした知能の低い虚。

得意の鬼道を放つても、死神の力は少しも戻っておらず、その鬼道は虚に直撃するも、幾分のダメージも与えてはいない。

虚がルキアに襲い掛かった時、虚を蹴り飛ばすものがいた。

それは一護の体に入ったコン。

ルキアに用があるのだが、如何せん探すのに夢中になった為にそれは記憶の彼方にある。

「早く思い出せ……」

「痛い痛い！！痛いっすよ姐さん！あ……俺何かに目覚めそう！！」

学校の運動場で虚に襲われているのは井上と有沢、そして二人の友人の本匠千鶴だ。
ほんしょうちづる

虚の能力で操られる男子生徒達を相手に、空手を得意とする有沢が奮闘している。

その様はメスの鬼を村人達が討伐しようと躍起になっている様である。

「かかってこいやー!!」

半ば暴走気味の有沢を虚が種子を撃ち込んで制止する。

運動場に井上と虚が立っており、先ほど種子を撃ち込まれた筈の有沢と本匠の傷は綺麗に消えている。

井上の周りに浮いている、妖精の様な者達の言葉を復唱し、虚に攻撃をしようとする。

「椿鬼……孤天斬盾、私は拒絶する!!」

井上は椿鬼を虚に撃ち込む。

虚は真つ二つに裂け、そのまま消滅する。

井上もその場に倒れたのだが、何故かその場に現れた浦原商店の面々に連れて行かれた。

そして握菱鉄裁つかびしテッサイの肩にはチャドが担がれており、二人共誘拐された

——のではなく浦原商店へと運ばれた。

燕は今回出番無く……（後書き）

石田君、石田君、どうして君はそんなに白いの？

「誇りを持っているからだ!!」

さいですか。

という事で感想お待ちしています。

ちよっくら編集した結果で、海燕は内なる虚を克服していません。
あれでは克服が早すぎるという指摘と自分もそう思った結果です。

燕は白と赤に遭遇する。

一護、海燕、ルキア、コン、そして石田。

今、この場に今回の事件の重要人物が集まっていた。

死神である一護、海燕、ルキア。

滅却師である石田。

そして改造魂魄のコン——はあまり関係ないのだが、一応頭数には入れておく。

そして一箇所に虚が集まっているのを見て、石田がそれを追う。

「僕は君達の前で死神より滅却師が優れているのを証明する！！指を啜えてそこで見ている！！」

石田の言葉に一護は溜め息を付くが、次の海燕の言葉により、その表情が引き締まる。

それは死神の手により滅却師が滅んだという、学校の教科書には載っていない、歴史の闇。

「多分だが、あいつは自分の先祖の仇を討つために俺達に勝負を挑んだんじゃないか？」

海燕の言葉に一護は何を思ったか、石田の元へ走り出した。

自分を邪魔する虚を蹴散らしながら、一護は石田の元へと辿り着く。一護が石田の先ほど海燕がいった戦う理由を確認するが石田はそれを否定する。

「僕の戦う理由はそんなんじゃない……志波さんから何を聞いたか知らないけど、勘違いしないで欲しいね」

石田は過去に祖父を殺されている。

それを石田の口から聞いた一護は一瞬戸惑った表情をするが、直ぐに持ち直す。

石田の祖父、つまり師匠を直接殺したのは虚だ。

だが、石田の祖父は長年死神に訴えかけていた。
我らは強力すべきだと。

そしてある日、祖父は虚に襲われた。

滅却師と死神が繋がっていれば、直ぐに助けが到着し、祖父は死ぬ事は無かっただろう。

「優しかった、師匠^{せんせい}を殺した死神を、僕は許す事が出来ない!!」
そういった石田は辛そうな表情をしていた。

そんな石田に一護が近づき、何をするかと思いきや――

「話がなげえ!!」
飛び蹴り、だった。

「テメエの話、長くて最初の方は忘れちゃったけどよ……テメエの爺さんが言いたかったのは……」

一護は石田の背に自身の背を預け、斬月を構える。

「死神と滅却師が協力した方が良い、って事だろ!?!それを今やらないでどうすんだ!!」

一護と石田、黒と白の共闘は意外にも息が合っていた。

白の方が何体もの虚を一度に攻撃し、黒が一体ずつ、確実に止めを刺す。

そんな中、ルキアも、海燕も予想していなかった事態が起こる。
^{メノスクランデ}
大虚、幾百の虚が折り重なった怪物が、現世に姿を現したのだ。

『オオオオオオオオオオ!!』

高く、咆哮を上げる大虚に石田は怯む。

「周りの虚の相手をしながらあれを倒せって言うのか!?!馬鹿にしている!!」

その時、一護達の周りにいる虚が次々と消滅していく。

「黒崎サン、助けにきましたよーん」

扇子を口元に当てながら不適に微笑む浦原と鉄裁、そしてジン太と雨。

さらに海燕までもが辺りの虚を殲滅に掛かっている。

「周りの雑魚はアタシ達に任せて、アナタ達はあの大虚をお願いします」

一護は浦原の言葉を聞き、大虚元へと走っていった。

「浦原さん……あれを今の一護に任せて大丈夫なのか？」

浦原は海燕の問いに唯頷くだけで、それ以上は何も言わなかった。

大虚に向け、一護は月牙天衝を放つ。

それを大虚は口から虚閃を放ち、応戦する。

一護と大虚では大虚の方が押しており、虚閃が一護の所まで届いた。
一護の霊圧は大虚と共鳴し、段々と高まっていく。

斬月で虚閃を弾いている内に、勢いは弱まり、威力も弱まっていく。

「月牙……天衝！！」

一護の刀は溢れ出る自身の霊圧に耐え切れなくなり、それを感じた一護はそれを大虚に向けて打ち放つ。

それは大虚の体に傷を付け、大虚を追いつ返す事に成功する。

その後、一護の霊圧は暴走し、刀の形状を保つ事が難しくなっていた。

それを石田が次自身の武器、弧雀こじやくで吸収し、空に向けて打ち放つ。
そうする事で、一護の霊圧を安定させようと考えたのだ。

霊圧の吸収、発射を繰り返していく内に一護の霊圧は安定し、段々と落ち着いていく。

「そんな顔してる奴殴れるかよ……」

一護は石田から顔を背け、そういった後、立ち上がり、石田の肩を担いで傷を癒すために浦原商店へと向かった。

夜の道を走り、息を切らせながら自身の犯した罪を頭の中で反芻する。

人間への力の譲渡、それがルキアの犯した罪。

ルキアは一護や海燕に迷惑をかけまいと、黙って黒崎家を出た。

「私は間違っていたのか……？」

後悔の言葉ともとれるその言葉を吐いた時、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

それは幼馴染である、阿散井恋次という死神の声。

恋次は自身の斬魄刀でルキアに斬りかかるが、ルキアはそれを間一髪でよける。

そして恋次と共にいるのは六番隊長、朽木白哉。

その白哉と共にいるという事は恋次は副隊長なのだろう。

少し会話をした後で恋次はルキアに再び斬りかかる。

が、遠くから見覚えのある青白い矢と、蒼い水流が飛んできたため、恋次の行動は制止される。

「お前……阿散井、だよな？ 何でテメルキアに攻撃してんだよ？」
水流を発射した主、海燕がそう言うのと恋次の表情は驚愕に染まる。

「何で、海燕さんが……死んだ筈じゃなかったのか？」

恋次が驚いている間にも、海燕はルキアを自身の元へ引き寄せる。
そして恋次の後ろにいる白哉に目をやった後で、生唾を飲み込む。

「おい石田、朽木と一緒に逃げるのと、俺と一緒に戦うの、どっちがいい？」

石田は眼鏡のズレを直した後で黙って海燕の隣に並ぶ。

それを後者を選択するという意味だろう。

「勘違いするな、僕はクラスメイトを護りたいだけだ」

「へっ、俺だって部下を護りたいだけだっつーの！」

互いの利害を無理矢理一致させ、石田は遠距離から、海燕は近距離から恋次を攻撃する。

尤も、海燕の攻撃は、恋次を狙った物ではなく、恋次の刀を使わなくさせる為に罅迫り合いを仕掛けた物なのだが。

石田の狙撃が一旦止み、海燕と恋次が離れた所をまた狙撃する。

「どうして、阿散井……テメルキアがルキアに刀を向けてんだよ？ 何かちげえだろ？」

海燕の言葉に一瞬戸惑った表情をした事から、それは彼の本意では

ない事が伺える。

「恋次……死人の言葉に耳を傾ける必要はない」

白哉は特に手出しをする訳でもなく、一言、恋次に向かって口を開く。

「海燕さん……悪いが、やらせてもらうぜ!!」

一護が向かっている場所には知らない霊圧が二つ、そして覚えのある霊圧が二つ。

それは石田と海燕の物である。

一護は瞬歩を駆使してその場へと向かう。

現場へたどり着いた頃には石田は気絶しており、少し傷を負っているが、まだ十分にた戦えている海燕と息切れを起こしている恋次が戦っていた。

白哉は相変わらず二人の戦いを見ているだけである。

「海燕さん!」

一護が瞬歩で海燕の隣に立つ。

「あの赤髪は“今は”オメエと同程度の實力だが……行けるか?」

「行けても行けなくても、どっちにしても行く!!」

「そうかよ」

一護は斬月を構え、恋次に斬りかかる。

一方で、海燕は白哉と相對し、振花を構える。

「兄が何故此処にいるのか、そんな事はどうでもいい。私は任を遂行するのみ」

白哉は未解放の刀を構え、海燕に斬りかかる。

副隊長と隊長なら、どちらが強いかは戦わずとも分かる事だが、海燕は白哉の攻撃を見事に防いで見せた。

「こちとら毎日隊長各の連中と戦ってんだ……テメエが隊長だろうが簡単には負けねえよ!!」

一護と恋次の戦いは、今の所一護が優勢だ。

その理由はまだ恋次が刀を開放していないからだろう。

「おい、テメエの刀はなんて名だ？」

恋次の突然の問いに、一護は簡潔に、答えを口にする。

「斬月だ」

そうかよ、一言行った後と恋次が一步引き、刀の解号を唱える。

「咆えろ——“蛇尾丸”——！！」

瞬間、恋次の刀の形状は刃のついた鞭の様になり、一護の方へと伸びる。

それは一護の肩に僅かながらに掠り、少量の血を流させる。

「ラオラオラオラァ——！！」

恋次の刀は一護によける暇を与えずに、間髪を入れずに攻撃する。

一護半ば強引に、斬月に備わっている唯一の技を発動する

「月牙……天衝——！！」

それを食らった恋次は、後ろに吹っ飛ぶが、地面に脚を伸ばして踏みとどまる。

「効かねえんだよ！」

蛇尾丸を振るう恋次は今、何を思っているのか、幼馴染を傷つける自分は何なのか？その一瞬の迷いが、自身の腕を鈍らせた。

「これで、終わりだぁ——！！」

そう叫ぶ恋次の猛攻を一護は容易くよけ鳩尾に斬月の柄の部分強く打ち付ける。

恋次は倒れ、一護は息を切らしながら、彼方で戦っている海燕の元へと向かった。

燕は白と赤に遭遇する。（後書き）

……何も言わないでください（泣）。

ええ、わかっていますよ、駄文なのは。

後で編集しますので今はお見逃しください。

燕の魔は進行する（前書き）

前にも言いましたが、編集した結果で、海燕は虚を克服していません。

それを踏まえたくうえでご覧になってください。

燕の魔は進行する

海燕と白哉の戦闘は最初こそ両者互角だった物の、悲しきかな、副隊長と隊長の実力差は今すぐには埋める事は出来なかった。

因みに海燕は毎日仮面の軍勢と戦闘訓練を行なっている為、副隊長の中では一番強い。

尤も海燕は“元”副隊長なのだが。

「……兄は何故、尸魂界に牙をむく」

小さく、夜の闇に消えてしまいそうな程に静かな声で、白哉は言った。

「此処で尸魂界の掟だから、って引いちまうとよ、今まで大事にしてきたもんが全部逃げちまう様な気がする、俺が俺じゃ無くなっちまう様な気がするんだよ。……理由の説明はこれでいいか？」

その言葉と共に瞬歩を駆使して白哉の後ろへ回り込む。

当然、その様な不意打ちに白哉が引っ掛かる筈もなく、逆に右肩から斜めに一閃されてしまう。

「くだらぬ」

倒れた海燕を尻目に、ルキアを捕縛しようとするルキアの方へ歩み寄る。しかし、それは一護によって阻まれる。

「行かせねえよ」

「退け、羽虫が」

白哉が刀を振るうが、一護が巨大な斬魄刀、斬月の腹でそれを防ぐ。一旦距離を取り、ルキアを下がらせた後で月牙天衝を放つ。

「貴様と私、何が違うか教えてやろう……」

月牙天衝に中る寸前で瞬歩を使ってそれを避ける。技を放った後で、隙の大きい一護の後ろを取る。

「格だ」

一言、そう言った後、死神の力の元である鎖結さけつと魄睡はくすいを破壊しようとするが、一護は背中に斬月を回してそれを防ぐ。

「格……か？」

挑発するように言う一護に白哉は無表情で再び刀を振るう。

狙いは首、しかし一護は瞬歩でそれを回避する。

一護は内心焦っていた。

攻撃を回避する隙は合っても、攻撃を与える隙はない。

前者も、白哉が本気を出していないだけで、恐らく斬魄刀を開放したら間違いなく殺られるだろう。

そんな中、一護にとって希望の光が見えた。

海燕が目覚めたのだ。

しかし、それは希望の光を掻き消す、闇の渦を呼び込む物だった。

『主め……此処迄やられてまだ死なぬか』

その声は海燕の物ではない。

そう、それは海燕の心に巣食う、内なる虚、メタスタシアの声。

『殺されたい馬鹿はお前か……それともお前か？』

仮面の付いた顔を不気味に歪ませるメタスタシアは首の骨をコキ、コキと鳴らす。

さらに一護と白哉、交互に指を指し、ジリジリと歩み寄る。

白哉に斬りかかったメタスタシアは白哉の手に持つ、斬魄刀を消滅させて、その中性的な顔に傷をつける。

『どうした、顔は傷つけては不味かったかの……！』

狂気的笑みを浮かべたメタスタシアは、白哉を一方的に痛めつけていく。

そんな中、怯えたような、何が起きたたのか分かっていない表情をしたルキアが目に入る。

『お主は……我と共にこの体の主を殺した娘か？』

メタスタシアの言葉に、ルキアの表情は凍りつく。

『主……海燕、と言ったか？あやつは恨んでおったぞ？忌々しい貴様のせいで殺された、痛かった、苦しかった、となあ……！』

ルキアのトラウマを抉るような言葉に、ルキアの呼吸は乱れ、体は小刻みに震える。

白哉は隙を見せたメタスタシアを斬りつけようとする。

しかし、メタスタシアの能力により、刀は消滅しており、その腕は虚しく宙を斬るだけであった。

『死ぬ死ぬ死ぬ死ぬええ！！私の餌となれ、肉となれ！！貴様ら死神はそれしか使い道が無いのだから！！』

狂った様に、否、実際に狂っているのだろう。

メタスタシアは叫びながら白哉を斬りつける、

止めの一撃を、メタスタシアが食らわせようとした時、両の腕がまるで別の意思を持ったかのように動く。

「何勝手なことしてくれてんだよ、引っ込め、馬鹿野郎」

仮面に隠れていない口の右半分から海燕の声が聞こえた。

『ぐ……大人……しく、我に任せておれ……愚か者が……グウウ！！』

苦しむように唸るメタスタシア、仮面を塗り取る海燕の腕。

両者一步も引かず、気を抜けば直ぐにでも精神が入れ替わる、そんな“戦い”を繰り広げている。

『グア……ギアアアアア！！』

仮面を完全に塗り取り、中から現れた海燕の表情は、申し訳なさそうな、決して強気な表情ではない。

「悪かったな、内の問題児が勝手なことしちゃってよ」

血に濡れた白哉は怪訝そうな表情を浮かべるも、直ぐに立ち上がった手のひらに霊力を込める。

「破道の三十三……」

「水天逆巻け……」

互いに、今できる最大の攻撃を構え、放とうとする。

「蒼火墜！！」

「振花！！」

蒼い閃光と蒼い水流がぶつかり合い、若干、白哉の方が押している。海燕は霊力を込め水流の勢いを強くする。

一方、白哉はこれが限界らしく、海燕に押され、そのまま、後ろに吹き飛ばされる。

海燕と白哉、互いに力尽き、その場に倒れる。

気絶した海燕の下に一護とルキアが海燕の下に駆け寄る。

「大丈夫か、海燕さん！」

「海燕殿！！」

そんな中、現世と尸魂界を繋ぐための門、穿界門せんかいもんが開いた。

中から出てきたのは言うまでもなく死神。

それも隊長と副隊長の二人。

三番隊隊長、市丸ギンと同隊副隊長、吉良イヅルの両名である。

「ハイハイお疲れさん、でもルキアちゃんは連れてくで」

瞬歩でルキアの背後に周り、一護を吹っ飛ばしたあとで、ルキアの肩を掴む。

そして無理矢理に、穿界門せんかいもんへと連れて行き、暴れるルキアの耳元に口を近づける。

「また君のせいで誰かが死んだりするの、嫌やろ？ 大人しくしとき？」

その一言だけで、無力化したルキアを穿界門せんかいもんの中へと連れて行く。

「やめろ、テメエ、狐野郎！！それが死神のやり方かよ！！」

「その通りや……ホンマ、堪忍な？」

バイバイ、と手を振るギンに続き、白哉と恋次を担ぐイヅルが穿界門へと姿を消す。

その場には、気絶した海燕と、ギンの放った鬼道のせいで身動きが取れないでいる一護が虚しく叫んでいた。

尸魂界に到着したギンとイヅル、そしてルキア。

イヅルはギンに対してある疑問を投げかけた。

「あの少年ともう一人……顔は見えませんでしたがああ死神……何故殺さなかったのですか？」

「なんや、僕が信用できへんの？」

ギンの問いに、イヅルはいえ、と否定したあとで謝罪をする。

「それにしても……あの死神、何やったんやろ？ 報告せえへんとな」

ギン達はルキアを牢屋に入れるため、三番隊の地下へと向った

燕の魔は進行する（後書き）

市丸ギンの登場です。

一護を殺さなかった理由、まあみなさんお分かりだと思いますが、一応まだ伏せておきます。

それはそうと、評価、感想等々、いつでもお待ちしておりますのでお気軽にどうぞ。

誤字脱字、おかしい所、ストーリーの駄目出し、なんでもいいです。どうぞよろしくお願いします。

燕と母は修行をはじめ

地面に打ち付ける雨の音が鬱陶しく一護と海燕の耳に届く。

雨が降っているのは一護の母親と海燕の妻が死んだ日と同じ。

さらに言えば、海燕が死んだ日でもある。

勿論の事、海燕は現世で霊子が再構築され、蘇っているので、海燕が死んだ日は関係がない。

「畜生……」

一護の声が口から発せられ、雨の中に消える。

海燕は未だ目を覚まさず、雨のせいで呼吸の音も聞こえない。

「あの日も、お袋を護れなかった。今日もルキアを護れなかった。俺は“一護”なのに」

一護は嘆き、己の無念を呪う。

“何か一つを護り通せるように”とつけられたこの名に泥を乗ってしまった。

母親からつけられたこの名前に。

「畜生、何でだよ……」

頬につたう雫は雨なのか、それとも——涙なのか。

一護は意識が遠のき、そのまま気絶する。

「ずいぶんと派手にやられましたねえ……」

聞き覚えのある、胡散臭いあの男の声。

雨が、止んだ気がした。

一護が目を覚ました場所は浦原商店の客間。

体はいつのまにか人間に戻っており、襖が開いたと思ったらそこからコンが姿を現す。

「おい！大丈夫か一護！！まったく、派手にやられやがって！やれやれだな！！」

ルキアが連れて行かれたのが知らないのか、否、知っていて、尚一

護に明るく振舞うコンの表情は若干曇っており。それでもコンは一護を責めようとしない。

「何で……だよ」

一護が小さく呟くとコンはああ？とぶっきらぼうな返事をする。

「何で、責めねえんだよ？お前にとってルキアは……」

そう言いかけた途中でコンは一護の顔面に蹴りを食らわす。

「そうだ！おめえ等が姐さんを助け損なったから………次は絶対助けるんだろ！！間違いない助ける！絶対助ける！！やれ助ける！！」

コンなりに励ましているのだろうか、身振り手振りを交えて一護に喝をいれる。

そんなコンの頭を掴んで一護はコンに笑いかける。

「つたりめーだ！！今すぐにも助けに行つてやる！！」

一護とコンが騒いでいる間に開きかけだった襖が一気にガラガラと開く。

「うっせーぞお前ら！オイ一護、浦原さんが呼んでっからこっち来い」

海燕は一護を連れて浦原のいる応接間へと足を進める。

「どうもお！黒崎サン。目が覚めたようだなにより。少し話があったのでそこに座ってください。」

浦原に誘われるまま、浦原の向かいの席へと座る。

海燕も同様で、一護と浦原の中間の席に座る。

「さてさて、朽木サンは尸魂界に連行された訳ですが……お二人は勿論、助けに行くんですよね？」

浦原の問いに、一護と海燕は声を揃えて当然、と言う。

よろしい、と浦原が頷くと突然、卓袱台の上に黒い猫が姿を現した。

「うお、化け猫！？」

一護がそんな反応をすると一護の顔面に三本線の傷が刻まれる。何処かで見た様な光景に、海燕は思わず苦笑する。

この夜一サンという名前の猫は人型に化けることが出来る。

尤も、人型の方が本来の姿なのだが、今はそこはどうでもいい。

夜一によるとルキアの処刑は今よりもっと後の日付であり、その間に一護と海燕に修行を施すとの事。

一護は浦原に、海燕は仮面の軍勢に。

一護の目標は誰かを斬る覚悟を手に入れること、海燕は虚化の習得とあともう一つは浦原が口に出さないため、今現在ではわからない。

修行の開始は一週間後から。

それまで二人は傷を癒すことに専念した。

燕と母は修行をはじめる（後書き）

海燕の修行は虚化ともう一つ、今は言えませんが、その単語自体はブリーチを読んでいる方なら知っていると思います。

燕は敵を打つ（前書き）

一昨日まであんまり投稿出来ていなかった為、今日は二つ投稿します。

燕は敵を打つ

海燕は現在、仮面の軍勢の元で虚化の訓練をしている。虚化し、暴走した海燕を仮面の軍勢のメンバーが抑える。

そこまでならいつもと変わりが無いだろう。

だが今回は仮面の軍勢の虚化を解禁している。

その理由は今回の虚化が何時より激しい者になるだろうとの予測だ。海燕がシュリーカーと戦っている時に出た虚の力は海燕に頭痛を催す程度の物だが、つい先日、白哉と戦った時は表に虚の人格が出てしまっていた。

それはつまり内なる虚の力が上がった事を意味するだろう。

勿論、それは海燕自身が強くなったから、それに乗じてメタスタシアも力を増したに過ぎないのだが、今度虚化の訓練をする時は前に上に暴れると予想された。

そしてそれは予想から現実が変わる。

「こ、こんのハゲ！！なんちゅう霊圧ぶちかましとんねん！！」

鬼のような仮面を装着し、虚の姿そのものとなった海燕に斬りかかる。

海燕は嘗てのメタスタシアの様な姿になり、ひよ里に虚閃を放つ。

ひよ里は素早くそれを回避し、海燕の足を一閃する。

『グオオオオ！！』

口を大きく開け、咆哮を上げる。

それはひよ里を怯ませ、動きを止める為の物だった。

しかしひよ里は元護廷十三隊の十二番隊副隊長。

海燕と同じかそれ以上の戦線を潜り抜けた彼女にはその様な小手先は通用しない。

「そんなん効かんわ！ホンマにハゲた面しよってからに！！」
隙を見せた海燕に今度はひよ里の方が虚閃を放つ。

それは海燕の体にヒットし、数秒、動きを怯ませる。

「ひよりん！交代だよ！」

白が結界の中に入り、某ライダーヒーローの様なバツタを思わせる仮面を装着する。

「カイン！手加減しないけど死なないでね！行くよ、白キークク！」

それらしくポーズを構え、海燕に攻撃する。

「超・白キークク！！」

次に先ほどの蹴りよりもさらに強力な技を繰り出す。

尤も、見た目は先ほどと同じである。

「スーパールトラ白キークク！ダイナマイト白キークク！えーと、スペシャルデリシャス白キークク！」

技名こそ違うものの、全て同じ技であるのは言うまでもなく、しかしその蹴り技で海燕を追い詰めていく。

「止めはあゝ虚閃！！」

虚特有の閃光を放った白は「ビクトリー！」と言いながらガッツポーズを構える。

「さーてカインはどうなったかな？」

テクテクと海燕に近寄り様子を見ようとする。

「馬鹿！！近づきすぎだ白！！」

拳西の忠告は既に遅く、白は海燕に吹っ飛ばされる。

「……丁度一時間や白、交代するで」

リサが先程の白と同じように十字模様の入ったダイヤ型の仮面を装着する。

海燕は頭に生えている触手の様なものを伸ばし、リサを威嚇する。

「生憎と触手プレイは興味ない、戻ってくるまで相手したるわ！！」

“外”で仮面の軍勢と虚化した海燕が戦っている中、“内”では生身の海燕とメタスタシアが内在逃走を繰り返していた。

海燕はメタスタシアに触れないで戦うため、鬼道や振花の能力だけを駆使して戦っている。

「それでも食らええ!!」

詠唱破棄で破道の三十一、赤火砲を掌から放つ。

海燕は死神なる前、霊術院生の頃からその秀才ぶりを発揮していた。入学から三ヶ月で始解を習得し、八ヶ月で鬼道は詠唱履きで六十番台まで放つことが出来る。

七十番台も詠唱付きなら出来る為、護廷十三袋は非常に惜しい人材を無くしたと言えよう。

「振花あ!!」

斬魄刀の先端から水流を放ち、メタスタシアに撃ち放つ。

『効かんわ!!』

対して、メタスタシアも“振花”から水流を放ち、相殺しようとする。

その威力は互角、海燕とメタスタシアの霊圧、霊力は繋がっており、海燕が強くなればメタスタシアもそれだけ強くなる。

このままでは埒が開かないと海燕は水流の威力を保ちながら鬼道の詠唱を放つ。

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ……」

対して、メタスタシアは死神の訓練を受けていないため、鬼道を使用することが出来ない。

しかも海燕が鬼道の詠唱をしている事に気付いていないため、水流を止める事は無い。

「破道の七三、双蓮蒼火墜!!」

互いの放った水流とは別に、その横から二本の蒼い閃光がメタスタシアに向け撃ち放たれる。

鬼道を回避すれば水流が襲い、水流を回避すれば鬼道がメタスタシアを襲う。

仮に両方とも回避する事が出来ても、その時に大きな隙が生じて海燕に急所を一突きされるだろう。

『己れええ!!』

結局、メタスタシアはどちらとも回避する事が出来ず、さらには左胸を振花で一突きされてしまう。

尤も、虚に心臓があるのかは不明だが、振花をグリグリと左胸を掻き乱す。

『ふむ……私の負け、か』

「二度と俺の前に現れんじゃねえ」

メタスタシアはフン、と鼻を鳴らしたあと、黒く変色し、消えていった。

現実世界では、平子が虚化した海燕と戦っていた。

しかし突然、海燕の動きが停止し、虚化した体に罅が入った。

海燕が、虚を克服した瞬間だった。

燕は敵を打つ（後書き）

克服するのが早すぎ、というツツコミはご勘弁。

この後ソウルソサエティ言ってルキア助けて〜という流れがあるの
で、

ノンビリやっているとグダグダになってしまうのです。

燕は猿女と戯れる（前書き）

猿女、まあお分かりだとは思いますがひよ里です。

所で最近知ったのですが、BLEACHに出てくる死神や人間の名字って実際にある名字だけ使っているらしいですよ。

藍染さんとか、日番谷さんとか実際にいるんですねー？

皆さんの周りにはそういう名字の人いますか？

燕は猿女と戯れる

海燕は虚化を習得した後、仮面を装着し、ひよ里と特訓という名の喧嘩をしている。

勿論、ひよ里も仮面を装着しており、喧嘩の様子は殆ど互角で、ひよ里が僅かに押している位だろう。

ひよ里の仮面の口が大きく開き、破壊の閃光、虚閃が発射される。それを海燕は振花から水流を放ち、相殺させる事でそれを防ぐ。

「なんやねん！そんなしょっぱい攻撃しか出来んのかいな！！」

ひよ里が挑発気味にそういうと海燕は顔を顰める。

そして水流を放った上で、仮面の口内から虚閃を放つ。

「ゲッ！！何時の間に覚えたんやそんなもん！！」

蒼い色をした虚閃と水流は混ざりあい、一本のレーザーとなる。

それは連射は出来ないものの、持続時間が長く、実戦向きの技だった。

しかし、虚閃が撃てるのは虚化が有ってこそその攻撃である。

【ピシ】

「あ」

つまり虚化が切れてしまったら、この攻撃は即座に使用不可となってしまう。

「ようやくたなあ？ハゲツバメ、コラ」

ひよ里が拳をバキボキと鳴らして海燕を威嚇する。

それでも海燕は怯むことな無く、鬼道を放つ。

「破道の五四、廃炎！！」

円盤状の炎の塊がひよ里に向け発射されるが、ひよ里は自身の斬魄刀、鹹大蛇くびきりおろちの一振りですそれを掻き消す。

「己の虚化が切れてる時点で、この勝負はついとんのや、ハゲエ！！」

鹹大蛇を携えたまま、下肢に反動を付けて大きく跳躍する。

そして海燕の頭上まで飛ぶと――

「オラオラオラァ!! これで終いやあ!!」

両足を海燕の顔面に向け、激しく踏みつける。

ひよ里曰くこの技の名前はガトリング地団駄^{じだんだ}、らしい。

激しい蹴りの連打を食らった海燕は重力の関係でそのまま地面に膝を付き、ひよ里は止めとばかりに米神を蹴り上げる。

「……三十分、休憩したらもう一戦やぞ、覚悟しとき」

ひよ里の言葉は既に海燕の耳には届かず、海燕は遠い世界に旅立っていった。

虚化の訓練を一カ月もすれば段々と上達していき、元々海燕に才があった事から、今では十八時間以上、虚化を保つまでに至った。

「ハッ!! ウチのお蔭やな、感謝しとき!!」

ひよ里の言葉に適当に返す海燕の元に、平子が歩み寄る。

「海燕、浦原が何か用があるって言っとったで? なんか修業第二段階とかなんとか、よう分からんけどな」

平子の言葉に海燕はやっとか、という表情をする。

浦原の言っていた修業第二段階、とは海燕には今まで教えられず、有耶無耶になっていたのだが、此処に来てやっと教えて貰えるようだ。

海燕は浦原商店へと、浦原の話を聞きに行った。

燕は猿女と戯れる（後書き）

修行第二段階、まだまだ秘密です。

燕は故郷の土を踏む

今現在、海燕、一護、チャド、井上、石田、夜一の六名は断界だんがいと呼ばれる現世と尸魂界の間にある通路を走っていた。

海燕達は一ヶ月の修行が終わり、遂に尸魂界へと潜入する日がやってきたのだ。

戦鬪を夜一が走り、その後で海燕、一護、チャド、井上、石田という順に走っている。

夜一は勿論、海燕と一護は瞬歩を使える為、先に行っても良いのだが、瞬歩が使えないチャド達に付き合っ走っている。

因みに、滅却師である石田も、飛廉脚ひれんきやくという高速移動術を使えるのだが、

彼も皆に、主に井上に合わせて走っている。

途中、後ろから拘突こうとつと呼ばれる侵入者排除気流が後ろから追ってきたため、さらに力を入れて走らなければいけない。

拘突が石田のマントを取り込み、石田本体每引きずり込もうとしたのだが、チャドがマントを引き千切り、石田を担いで走るというフアインプレーを見せ、さらに井上が自身の能力、盾舜しゅんしゅんりっか六花からの三天結盾を発動し、拘突を食い止める。

勿論それは立花本体が触れれば井上も飲み込まれるという一種の賭けだった。

尤も、井上自体はそれに気づいていない様だが。

「もうすぐ出口だ!!」

海燕が叫び、全員出口めがけラストスパートを掛ける。

光の中に入り、たどり着いた先は——空中。

海燕を一番下に、一護、チャド、井上、石田と落下していき、積み重なるように地面へと落ちる。

因みに、夜一は猫特有の身体能力で華麗に着地した。

「あ! 黒崎君、格好が芸術的!!」

「うるせえよ……」

一護の落下したあとのポーズをみてそういう井上。
悪気が無いのは分かっている為、一言だけで終わらす。

「此処が尸魂界か……江戸時代の様な風景だ」

石田がそう言うのと海燕はそれについて説明する。

尸魂界にある物は凄く限られているからな、だからいつまで経っても文化が発展しねえんだ」

何でもない様に話す海燕の表情は何処か穏やかで、故郷に帰ってきたからか背筋を気持ち良さそうに伸ばす。

「おい、ひよつとしてあっちが死神の暮らす瀨霊廷ってやつか？」
そういつて走り出す一護は一番乗り、とまるで子供の様に走る。

すると空から無数の壁が落下し、一護の侵入を防ぐ。
さらに死神だろうか、巨人を思わせる程の体躯を誇った男が壁と共に降ってくる。

「なんだ、オメエらは、さでは旅禍りよかだなや？」

この死神の名前は？丹坊、瀨霊廷西・白道門じだんぼうの番人。

？丹坊の下に海燕が歩み寄り、おい、と声を掛ける。

「おい、？丹坊！俺だ、海燕だ！！俺に免じて通してもらっちゃ駄目か？」

「え、え、えー！？海燕さん、何で、死んだ筈じゃ！？生きてただか！？」

取り乱す？丹坊を海燕は手を合わせて頼み込む。

「頼む！！どうしても俺達は此処を通らなきゃいけないんだ！！」

海燕の言葉に？丹坊はすまん、と頭を下げる。

「海燕さんの頼みと言えども、オウは門番。門番が侵入者を通しちゃならねえだ」

そうか、と肩を下げる海燕を見て、？丹坊は何かを考える。

「海燕さん、どうして蘇ったか知らねえけども、あんたがやろうとしてる事は決して間違っちゃいねえはずだ。海燕さん、何をしてるか知らねえけど、頑張ってください……」

深々と頭をさげる？丹坊に海燕はおう、と手を上げて答えた。

燕は故郷の土を踏む（後書き）

第二段階の修行どうした！というツツコミはご勘弁。
描写はしておりますが、もう完了しました。
まあ。焦らしている訳ですよ。
そんなわけでノシ

燕と鶴と鷺と……（前書き）

総合評価がもうちょいで70まで達するので調子に乗って一日で二話投稿。

燕と鶴と驚と……

現在、海燕達は西流魂街の村長の自宅にお邪魔している。

村長は最初こそ海燕に対して驚いたものの、事情を話せば納得――

――する筈もなく、余計に驚いた。

夜一が村長にとある人物の居場所を聞き、村長がそれを聞く前に驚愕する。

瀨霊廷には“あれ”で行くのかと、驚愕の色を隠せないでいる。

因みに海燕には夜一の探している人物も、村長が言う瀨霊廷に行く方法も良く知っている。

そう、よく知っているのだ。

「まさかあいつの手を借りて……なあ」

海燕は感慨深そうに言いながら苦笑する。

それを見て一護は一体誰なんだ、と尋ねる。

「前に話し事あるだろ？ 志波空鶴っていつてな、俺の妹だ」

『えええええ！！』

夜一以外の全員の驚いた声が重なり、海燕は耳を塞ぐ。

「あいつ、俺が生き返ったって知らねえからな……どうすっかな」

頭をガシガシと掻きながら考えるように言う海燕を他所に夜一と村長は話を進める。

そんな中、外からドドドドドド、と動物が走るような音が聞こえてきた。

その動物は猪、しかも普通の猪より巨大な体をしており、その上には人間が乗っている。

「よう、爺！！ 相変わらず元気そうだな！！」

猪に跨った集団のリーダーらしき男が壁を破壊しながらの登場する。

海燕はその男をみて、何故か失笑する。

家の周りにいた流魂街の住人は全員その場を離れ、此処にいるのは一護達と暴走族の様な手段と村長だけになってしまった。

「おい、何で死神が此処にいるんだよ……おい、聞いてんのか？ な・ん・で泥に塗れた死神様が此処にいるんだつつつてんだよお？」

百面相の如く次々と表情を変えていく。

海燕はあちゃー、とばかりに表情を顰める、岩鷺も冷や汗を掻きながらイソイソと家の中に入っていく。

それに続いて一護達は足を進めるのだが、勿論本位では無い。

「姉ちゃん!! 今帰ったぜ!!」

ガラガラと空鶴の部屋の襖を開けると、酒瓶が岩鷺の顔に直撃する。

「おせえ!! 今何時だと思ってんだ馬鹿野郎!!」

空鶴の姿は隻腕に丰满な胸と、何とも個性的な姿をしていた。

そして例の如く、空鶴は海燕を見て驚愕する。

のだが、此処からが他の人間とは違う反応をした。

「……ッ」

何時もは強気な性格をしているであろう思われる空鶴の目には涙がこぼれ落ちた。

「お、鬼の目にも涙……」

余計な事を言った岩鷺への鉄拳制裁を忘れること無く海燕は空鶴に近寄る。

「なん……で？」

「色々あってな、説明はめんどくせえから省くが、今此処にいるのは間違いなく俺だ。心配かけて悪かったな、空鶴……」

海燕が空鶴の頭を撫でようとしたその時、海燕にとって予想外の出来事が起こる。

空鶴の左腕が海燕の頬を捉えたのだ。

「虚なんかに体乗っ取られやがって、よくもぬけぬけと帰ってこれたな! テメエほんとに副隊長だったのか!? 都さん殺されて、仇も取れずに自分も死んじまいやがって!! 触んじゃねえよ!! 腑抜けが映る、アホ!!」

一頻り空鶴がそう言った後、海燕は体をプルプルと揺らし、握り拳を作る。

「ああ!? 折角生き返った兄貴に言う言葉がそれか!? 上等じゃねえか! 俺の強さを体に叩き込んでやる!! 覚悟しやがれ!! 愚妹が!!」

その後、二時間ほど何故か岩鷲を巻き込んだの兄弟喧嘩に発展し、志葉家が崩壊しかけたのは完全なる余談である。

燕と鶴と鷺と……（後書き）

なんか台詞ばっかになってしまった今回、空鶴の反応に関しては、しんみりとさせようかそうじゃないようにしようかで迷ったのですが、

しんみりとさせても感動を誘うだけの文才が僕には無いので、ギャグで終わらせました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3718y/>

強き燕は二度羽ばたく

2011年12月3日16時59分発行